

# 下小松古墳群陣が峰支群 発掘調査概報



川西町教育委員会

## 調査要項

- 本書は、平成12年度に川西町が国庫補助を受けて実施した町内遺跡発掘調査事業による、下小松古墳群陣が峰支群の発掘調査の概要報告である。
- 現場での調査は川西町教育委員会が主体になり、平成12年4月24日より同年7月19日にかけて実施した。
- 調査体制は次の通りである。

調査主体者 高橋 勉（川西町教育委員会教育長）

調査指導者 小林三郎（明治大学教授）

新井 悟（明治大学兼任講師）

調査員 齊藤敏明（川西町教育委員会文化財専門員）

調査補助員 澤田悠介 時信武史（以上明治大学大学院）

調査参加者 佐藤元希 渡辺淑恵 佐野恒平 菅野麻子 市川佐織 竹内美希  
當眞 彩（以上東北芸術工科大学学生）

栗田竹二 佐藤要蔵 金田シヅ 竹田きえ 鈴木信子 石田菊子  
金子三次 江口正志 島貫 忠

（以上（社）東南置賜シルバー人材センター）

- 次の各氏からは貴重なご指導・ご助言を得た。記して感謝したい。

北野博司 荒木志伸 川崎利夫 吉野一郎 角田朋行 茨木光裕

古屋紀之 菊地芳朗 黒沢 浩 佐藤庄一 青山博樹 斎藤主税

三上喜孝 辻 秀人（順不同）

- 本書の編集は、齊藤敏明が担当した。

### 本文目次

1 調査の経緯 .....	1
2 遺跡の立地と環境 .....	2
3 測量調査 .....	2
4 発掘調査 .....	4
5 出土遺物 .....	8
6 まとめ .....	10

### 図版目次

第1図 下小松古墳群位置図 .....	1
第2図 陣が峰支群測量図 .....	3
第3図 陣が峰支群トレンチ配置図 .....	5
第4図 J-1号墳主体部平面図 .....	7
第5図 J-1号墳主体部断面図 .....	9
第6図 出出土器実測図 .....	10

## 1 調査の経緯

下小松古墳群は山形県東置賜郡川西町大字下小松に所在する遺跡で、その一部は平成12年に国指定史跡となっている。ここで報告するのは平成12年度より3カ年の計画で文化庁の国庫補助（国宝重要文化財等保存整備費補助金）を得て実施した町内遺跡発掘調査事業の初年度の調査である。この事業実施に至る経緯についてまとめておきたい。

川西町では、昭和58年より下小松古墳群の調査を継続して実施してきた。平成11年にはそれまでの調査の成果をもとに、薬師沢支群・鷹待場支群・小森山支群の3支群179基の古墳を国指定史跡とするための手続きを行った。一方、これとほぼ時を同じくして実施していた3支群に隣接する個所の緊急発掘調査によって、それまで知られていなかった3基の古墳が発見され、古墳群の範囲がさらに広がることが判った。これを受けて、この年の秋に史跡範囲外における古墳の分布調査を実施し、緊急調査で確認された古墳を含めて、さらに3つの小地域にまとまる小丘の存在が確認された。これらの結果によって、将来の史跡追加指定を視野に入れた古墳群の範囲を確定する発掘調査が必要になり、新たに確認された小地域についてそれぞれ1カ年ずつ、合わせて3カ年間の範囲確認調査を行うこととしたものである。

なお、平成11年に答申された下小松古墳群の薬師沢支群・鷹待場支群・小森山支群の3支群については平成12年秋に国指定史跡として告示された。



第1図 下小松古墳群位置図 (S=1/25,000)

## 2 遺跡の立地と環境

山形県の南部に位置する置賜盆地は、周辺を吾妻・飯豊・朝日山の標高2,000m前後の山岳と奥羽山脈・白鷹丘陵に囲まれた盆地で、中央を最上川が北流する。峠を挟んで福島盆地や会津盆地、山形盆地などと接している。下小松古墳群は吾妻連峰と飯豊連峰に挟まれた母峰から北に派生する玉庭丘陵の先端、通称眺山丘陵の東斜面に展開する。北から陣が峰支群・永松寺支群・薬師沢支群・鷹待場支群・小森山支群・尼が沢支群の6支群からなる古墳群と考えられている（第1図）。

この盆地では近年になって、多くの古墳時代遺跡が調査されてきた。古墳時代の前期には米沢市横山古墳など方形を基調とする小規模な墳墓が点的に出現し、全長75mの前方後方墳・川西町天神森古墳を経て、前期の終盤には全長96mの稻荷森古墳が今の南陽市域に造られた。さらに中期後半以降には下小松古墳群に代表される大規模な群集墳が形成されるようになるなど、置賜盆地は当時の列島規模の社会動向と同様の歩みを進んできたことが明らかになってきた。

## 3 測量調査

### 現況

陣が峰支群は、J-1・J-2・J-3号墳の3基からなる支群である。現況は松林となつておらず、墳丘は下草を刈った状態であれば認認することができた。周辺の聞き取りでは、この個所で過去に大きな地形変化は行われていないとされ、調査前の観察では、

J-1号墳の一部が用水路の敷設に際して削られているほかは良好に遺存しているものと考えられた。

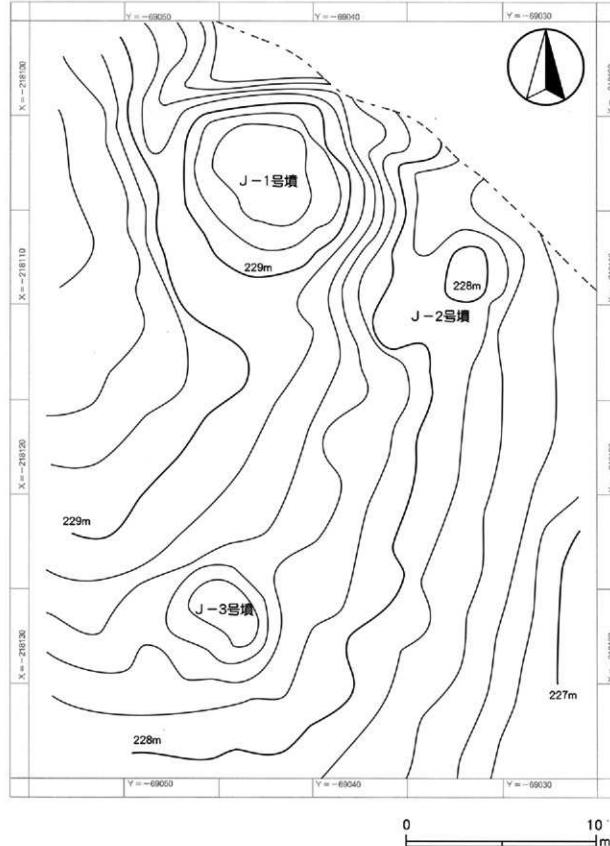
### 調査方法

測量に先立ち、付近の三等三角点を用いて基準点の設置を行い、古墳の分布範囲に日本平面直角座標軸に適合した5m間隔のメッシュを設定した。これを用いておよそ1,200m<sup>2</sup>の範囲を平板で測量し、絶対標高による20cm間隔の等高線を記入した1/1000の平面図を作成した。

### 調査成果

調査結果を縮小したものが第2図である。J-1号墳は、墳頂部最高点の標高が229.7mを示す。墳丘北面から西面にかけての直線的なラインが明瞭に観察でき、主丘が方形を呈することを示している。一方、視覚的に判然としなかった前方部については、測量図によても228.4mの等高線がわずかに前方部先端のコーナーを示しているに過ぎない。とくに西側はくぶれ部も明瞭でない。この結果だけでJ-1号墳を前方後方墳とするには心酔ない結果であった。J-2号墳・J-3号墳については、小規模ながらも自然地形とは異なる高まりが測量図に反映されている。それぞれの最高点はJ-2号墳が228.2m、J-3号墳が228.9mである。

なお、測量図に見られるJ-1号墳後方部の東に延びる尾根上の高まりは後世の客土であることが、削平された箇所の断面観察によって判っている。



第2図 陣が峰支群測量図 (S=1/200)



削平箇所の断面

#### 4 発掘調査

##### 調査方法

発掘調査は、墳丘の歴史的性格の確認という調査目的から、トレンチによる部分的な発掘方法を採った。調査区（トレンチ）の設定に際しては測量時に設定した5m四方のメッシュを基準として周囲の立ち木等を考慮し、アルファベットのaからnまでの順次14箇所のトレンチとJ-1号墳の墳頂調査区、最終的に合わせて15箇所を設定した。発掘調査面積は合わせて約107.5m<sup>2</sup>である（第3図）。

また、発掘調査前に、J-1号墳後方部北側の削られた面の断面観察を行い、周溝の有無・盛土の状況を確認している。

なお、ここではJ-1号墳の調査成果を中心に報告し、J-2・J-3号墳については本報告に詳細を譲る。

##### 調査成果

###### 墳丘

J-1号墳の墳丘各部について、トレンチでの発掘状況によって見ていく。

主丘である後方部は、jトレンチで北面が確認されている。墳丘は周溝によって自然地形と切り離されており、周溝の上端の

幅は約1.4m、現地表面からの深さは約0.7mである。周溝の断面はU字形で、墳丘側だけでなく自然地形側の立ちあがりも傾斜はきつい。平面は直線的で発掘前の等高線をよく反映している。



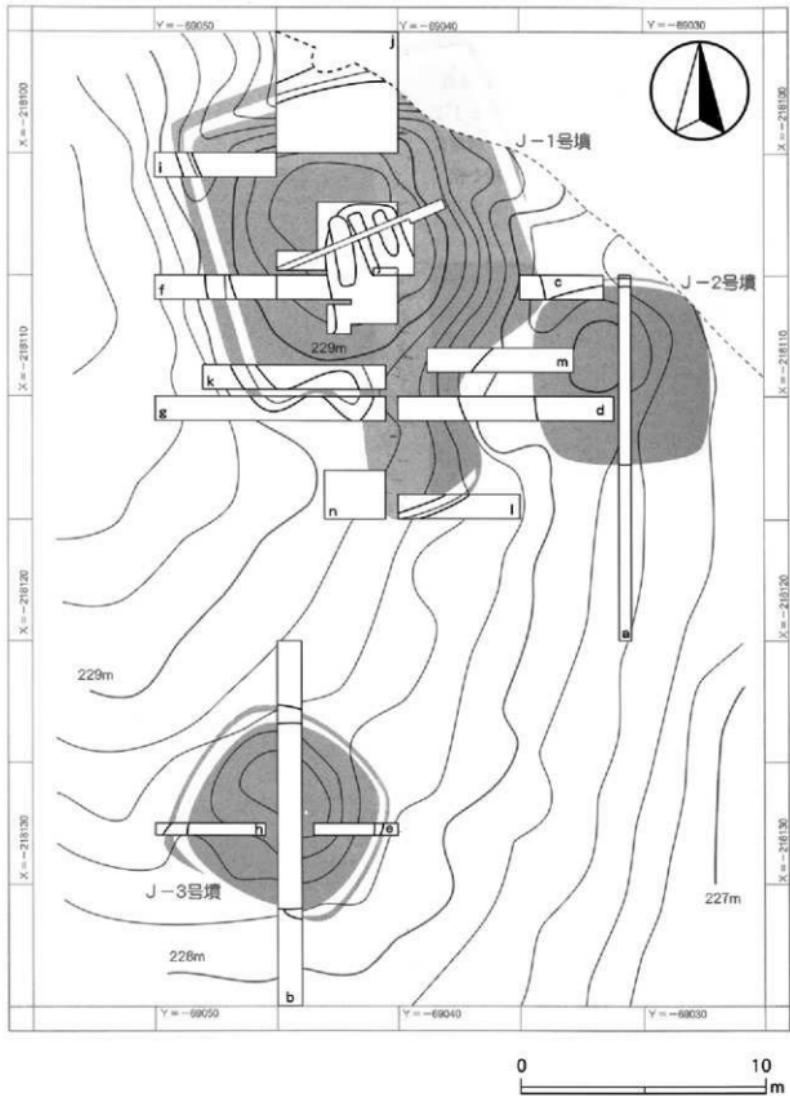
j トレンチ完掘状況（東より）

後方部の西面は、f・i・kの3本のトレンチによっておよその様子がわかる。3本のトレンチそれぞれ断面U字形の溝が確認されており、北側と同様、墳丘は周溝によって自然地形と切り離されている。上端の幅約1.8m、深さ0.8mである。3本のトレンチで確認された溝はほぼ一直線に位置し、jトレンチで確認された北面の周溝とはおよそ90度のコーナーを形成するとと思われる。主丘を方形と判断した主要な根拠である。



f トレンチ完掘状況（南より）

東面はcトレンチと後方部北東の断面が調査されている。削平部の断面ではU字形



第3図 陣が峰支群トレンチ配置図・墳丘復原図 ( $S = 1/200$ )

の溝が確認されているものの、cトレンチでは溝は明瞭に立ちあがらず墳裾はほぼ水平にカットされて造り出されている。また、このトレンチではJ-1号墳の崩落土とJ-2号墳の崩落土が部分的に切り合う。時間的には、J-1号墳の築造後、これに裾を接するようにJ-2号墳が築造されているようである。



cトレンチ完掘状況（北より）

東西のくびれ部にはk・g・m・dの4トレンチを設定した。西側のくびれ部にあるk・gのトレンチでは、平面がS字形をなす溝が確認された。kトレンチで確認された溝は、gトレンチでやや丸みを持ちながらほぼ90度に曲がり、後方部南東のコーナーを形成する。さらに、くびれ部で前方部側へ開き、ここで幅、深さとも急速に減じて収束する。



k・gトレンチ完掘状況（東より）

一方の東側はm・dの両トレンチとともに

溝は確認されなかった。dトレンチでは墳丘裾に明確な傾斜の変換するラインを見て取ることができ、前方部における墳丘裾を決定できるが、mトレンチではその変化は緩やかで曖昧である。



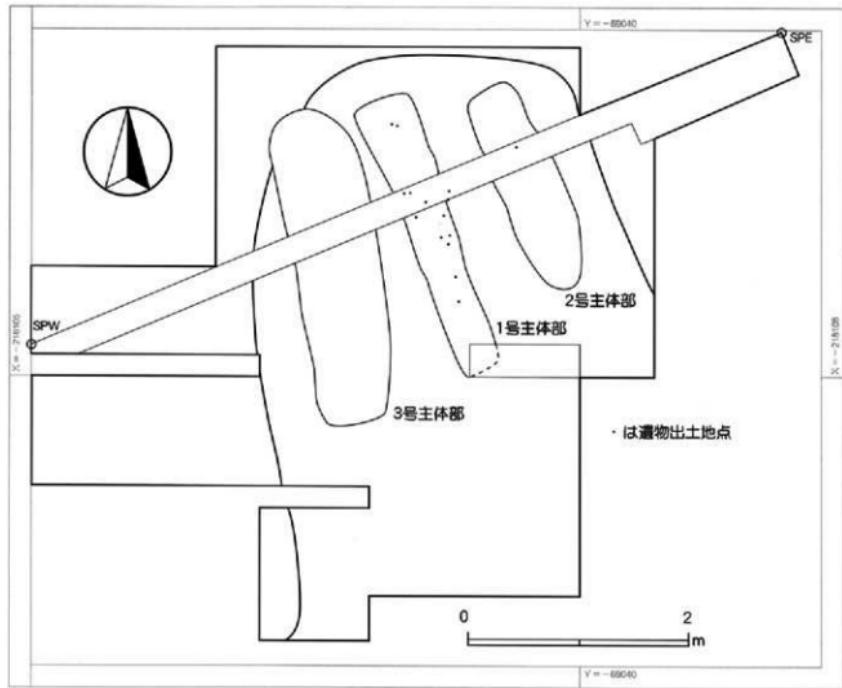
dトレンチ完掘状況（北より）

前方部前端は、lトレンチによって確認されている。幅約0.6メートル、深さ約0.2mのごく浅い溝が東西方向に走る。覆土は墳丘側から流れた暗褐色の土層で、土師器を包含するため、墳丘築造に伴う溝と判断した。西隣に設定したnトレンチでは溝の続きは検出されず、前方部の前端を区画するための溝である可能性が高い。



lトレンチ完掘状況（東より）

以上のことから、J-1号墳は、東側を除いた後方部と、前方部の前端に溝を巡らした主軸長17.8m、後方部幅12.4mの前方後方形の墳丘を持つことが明らかになった。



第4図 J-1号墳主体部平面図 ( $S = 1/40$ )

### 主体部

J-1号墳では、後方部の平坦面に必要に応じて拡張しながら設定した調査区の発掘によって3基の主体部と考えられる平面プランを確認した(第4図)。

確認面は、墳頂平坦面の表土下約0.2m、標高約229.2mである。墳丘の主軸上に1号主体部、その東に2号主体部、1号主体部の西に3号主体部がある。確認面での規模は、1号主体部で長軸2.64m×短軸0.4m、2号主体部で長軸1.96m×短軸0.58m、3号主体部で長軸2.88m×短軸0.8mである。



主体部平面プラン確認状況（南より）

これらの平面プランが主体部であるとの認識は、3基の主体部を横断するように設定したサブトレンチの発掘によるところが大きい。断面を観察すると、これら3基の主体部と思われるプランは上方から掘りこまれており、なおかつ、その底部にはやや粘性を持つ非常に極めの細かい土が堆積している。これまでの調査の経験から、これを木棺の腐朽によって形成された土層と思われる。

さらに第1主体部としたプラン内から確認面の付近で祭祀用と思われる土師器片(高杯・装飾器台・小型壺等)が多数出土している。

以上、プランの平面的な位置・断面の状



主体部確認面遺物出土状況（北より）

況・遺物の出土状況の3つによって、3基のプランを埋葬主体部とし、その構造は木棺の直葬と判断した。

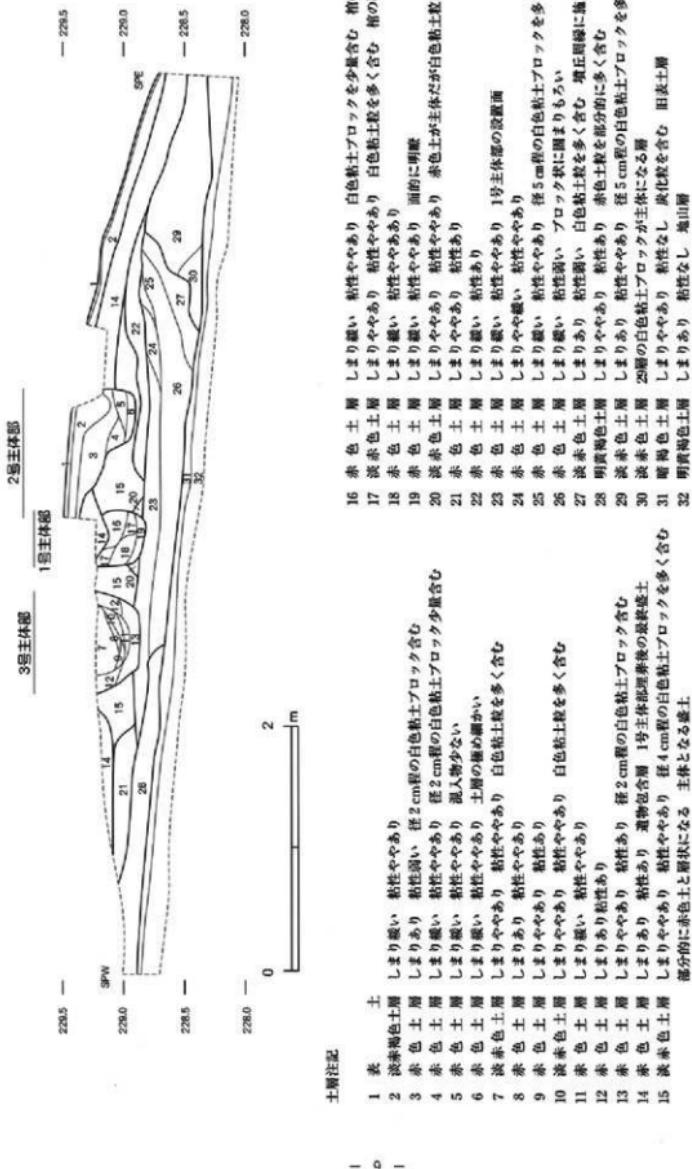
### 5 出土遺物

J-1号墳からの出土遺物は、土師器を中心で、各トレンチから出土したものと墳頂調査区と墳頂調査区から出土したものに分けられる。

各トレンチから出土した遺物で、図化が可能ななものにdトレンチの墳丘の崩落土中から出土した土師器の壺がある(第6図-1)。底部は平底でやや角度を持って胴部に至る。最大径は胴部の上半にあると思われる。頸は丸く撫でられ口縁部は明瞭な稜を持ちさらに外側に開く。いわゆる二重口縁の壺である。他にはk・gトレンチの周溝覆土から壺の胴部片等が、1トレンチの周溝覆土からはやはり二重口縁の壺の頸部片が出土している。

墳頂の調査区からは、装飾器台・高杯・小型壺などが出土している。装飾器台(第6図-2)は第1主体部プランの北端の確認面から受け部の破片が出土した。口縁部は大きく外反し、径5mmの円窓を持つ。円窓の数ははっきりしない。これを円盤状の

第5図 J - 1号墳主体部断面図 (S=1/40)



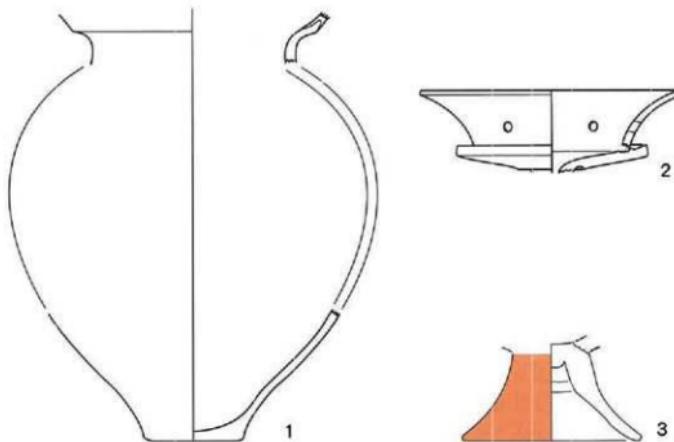
2段目で受け、この端部が外側へ突出するのが2段目の表面の剥離痕によって想定される。高杯（第6図-3）は円錐台状の脚部が装飾器台と同様の位置から出土している。表面は赤彩されている。内面は丁寧に削られており、下半はやや内彎する。他には、丸底で口縁部が直に延びる小型壺などがある。

時期が限られており、今後の検討によってさらに時期を絞ることが可能であると思っている。

なお、ここで言及しなかったJ-2号墳・J-3号墳については、いずれも主体部の確認には至っていない。しかし、地山の整形・盛土・土師器の出土から古墳と判断するのが妥当と考えている。

## 6 まとめ

ここで報告したJ-1号墳は、古墳時代の墳墓であることを確認することができた。その築造時期は、出土した土器の特徴から古墳時代の前期にあると考えているが、とりわけ、装飾器台についてはその出現する



第6図 出土土師器実測図 (S=1/3)

---

## 下小松古墳群陣が峰支群発掘調査概報

平成 13 年 3 月 31 日 発行

発 行 川西町教育委員会  
〒990-0121  
山形県東置賜郡川西町大字上小松 1736-2  
Tel 0238-42-2111

印 刷 (有) 笹原印刷

---